

Title	ペスタロッチの教育原理
Sub Title	
Author	小林, 澄兄(Kobayashi, Sumie)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1927
Jtitle	哲學 No.2 (1927. 7) ,p.223- 279
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000002-0223

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ペスタロッチの教育原理

今年二月十七日はペスタロッチ百周年忌に當る。この一小論文の起草は、これを記念せんがための微意からである。

小林澄兄

この一小論文の目的とするところは、現代の教育學的觀點から、ペスタロッチの教育思想の根本的なものを批判するにある。

然らばその根本的なものとは何であるか。この間に答へることは容易ではない。といふのは、彼れの著作のすべてに眼を通すことの困難があり、よしそのことを果し得たにしても、彼れの教育思想に嚴密な意味での體系がないからである。さうした體系でもあれば、根本的なものを摘出するのに、大に都合がいいのであるが、永い一生の教育事業の體驗から贏ち得た思想を、殆ど無體系に記したものの、み

であるから、根本的なものを抽出することの困難は、當然のこと、いはなければならぬ。

しかし何等の體系がなければ、根本的なものはあり得ないといふわけには行かない。體系なるもの、奥に、根本的なものが横はつてゐる。ナトルプのいふやうに、人の精神の分析的勞作が、如何に立派な論理的形式で發表されてゐても、その根柢を、人の精神の本源的な獨創的な、生々と直接にはたらく綜合の上に置くことが出来なければ、それは畢竟空虚なものである。ペスタロッチにあつては、體系を超越した、一種の *natürliche Philosophie* が存するので、それは眞理の源にさかのぼる天才のみの所有するところのものである。ペスタロッチの教育思想の根本的なものが、果してこの意味のものであるとするならば、吾々にとつては、更にそれを抽出することの困難が倍加して感ぜられるのである。

そこで私は、私自身がペスタロッチの著作の幾種類から學んだもののみを、私のこの一小論文の目的——現代の教育學的觀點から、彼れの教育思想の根本的なものを批判すること——の對象たらしめることを避けて、ホイバウムやキイゲットやナ

トルブの如き、ペスタロッチ研究の權威者が見て以て、彼れの教育思想の根本的なものと稱するものを、私の眼前の目的を果すための對象とすることにしようと思ふ。殊にナトルブの叙ゲアルシニテレンク述を最も據るに足るものとして、そこから發足しようと思ふのである。

二

ペスタロッチの確信によれば、人の精神の究極の創造物が思想であり、理念であり、精神中の精神である。哲學することは、人がその思想、理念を考量することである。彼れはその天分に適する仕事として、またその限りない人間愛によつて、子供の教育といふことを、自分の任務だと感じたのであるが、かく感じたのは彼れのいはゆる思想であり、理念であつたので、それを哲學的に認識し、且つ發表することを心掛けたとき、幾多の教育的著作が公けにされたのである。彼れの處女作「隱者の夕暮」(一七八〇年時三十四歳)に於て、その思索したところのものは、人の精神の内奥から生れる、普遍的真理の何であるかについてであつた。それから五年後、或人へ宛てた手紙によ

ると、彼れの探究は、眞面目に人を指導することについての普遍的理論を明かにするにあつた。彼は世の常の理論的哲學以上の何物かを探がし求めてゐたのであるが、人類の發展に於ける自然の進行についての余の研究(時一七九七年)に於ては、その當時までの哲學に、何等の教へを受けたのではなく、その公表に先ち、それを呼んで「自分の政治哲學」だとした。ところがそれは圖らずもフイヒテから、カントの哲學の結論と本質上異らないものだとの證言と讚辭とを與へられ、ヘルダーからは、それがルツウの思想と淺からぬ關係を保つとはいへ、その根本内容は「ドイツの哲學的天才の出生」を意味するものと看做された。またナトルプから見ると、ペスタロッチが、協同體は教育から教育は協同體から成立つとする點に於て、如何にも最高の意味での政治哲學であることが肯かれるので、プラトオの「國家」にも比すべき思索の方法が、ペスタロッチに見出されるのである。成るほど、分析的の明瞭は彼にない。彼にあつては、深い綜合があつて、それが分析的である以上の單純な明瞭を示してゐる。それにも拘らず、彼を酷評して戯言作家だといふものもあつた。流石にフイヒテやヘルダーの如き人の判斷は、彼れの單純な明瞭を見逃がさなかつた。

しかし彼がもしその教育事業の一頓挫のために暫く休息することがなかつたら、彼は多分その哲學的著作に筆を執ることなしに終つたであらう。故にその哲學的著作が他の幾多の著作と同じやうに、エピソオデの性質を帯びてゐることは、已むを得ないことである。スタンツに於ける教育事業も思はしくなく、大海の孤島で心身の疲勞を癒やすべく、グルニイゲルに退いて、靜かに英氣を養つてゐた彼は、再びブルグドルフにその教育事業を試みることになつたのであるが、その間いづも彼れの頭の中に往來してゐた惱みは、如何にかして「全き人を作る根據」を發見したいといふことであつた。「人の精神的發展の不變の原形」を討ねて、そこから教育教授の法則を導き出したいといふことであつた。彼れの「直觀」した「方法」なるものが、前に述べた意味での彼れの思想であり理念であつた。それを哲學的に妥當ならしめるには、彼自身よりも遙かに哲學的に修養してゐた同士のニイデラーに委嘱するのがいゝと彼は考へた。この人は彼を心から尊敬してゐたので、彼れの思想の眞髓を偽りなく傳へるのに、最も適任であつた。その後しかしニイデラーは、當時の新理想主義殊にシェリングの思想に深く同感して、ペスタロッチ本來の傾向

からや、離れて行くやうになつた。ペスタロッチもやがてそのことを認めて、遂にニイデラーと交を絶ち、同門シュミットを信賴するやうになつた。とはいへ彼は、教育の方法の探求を自分自身斷念したのではなく、一八一八年の誕生日にも、自分の希望の充たされることを期待する演説をしてゐる。一八一八年といへば、既に彼が七十二歳の老齡に達したときである。彼れの教育事業は失敗に失敗を重ねて、いらだたしく日を送るの外はなく、ニイデラーに對する不信ばかりではなく、自分自身の哲學約年齢にもたよりなく感じてゐたらうと思はれる場合ですら、例へばその「白鳥の歌」(一七八二—一七九五年)の中でも、彼れの努力が常に哲學的根柢の上に置かれてゐたことを示してあまりある。一八二六年、即ち彼が八十一歳にしてこの世を去る一年前に於ても、教育學は、人性の永久的法則を物語る深い心理學的原理の上に立脚しなければならぬことを確信し、教育理論は、常に明瞭の度を加へて行かねばならぬことを主張した。かゝる教育理論に基かないで、あやふやな斷片的努力をつづけて行つたのでは、教育の仕事が、いつまで經つても、內的な、確實な、生々した關聯を得るの道を發見することにはならぬであらう……かう彼は思ひめぐらした。

「リインハルトとガートルウド」(一九二〇年—一九二二年コッタ版、時四十四歳—四十六歳)の序言に於ては、彼は、ニイデラーの演繹的見解が、あまりに實際から遠ざかつてゐるのに反對して、體驗を重んずることの必要を説いてゐるのであるが、しかも彼は、彼れの行爲を全く盲目的に、何等の省察もない經驗の追隨に終らしめないことを熱望してゐる。のみならず、彼は經驗の過程に於て、その對象を顧みて、その中には、哲學的に基礎づけて始めて明瞭になるもの、尠くないことを期待してゐる。従つて彼は、演繹的分析的形式を全く否認したのではなく、また否認し難いことを十分承知してゐた。一八〇二年の「備忘録」に於ては、彼はその最後の結論を引くに當つて、時に確信に基き、時に全くの假定を以てしたけれども、彼れの教育說に演繹的基礎づけを與へようとした努力の痕の残つてゐるのは、明かな事實である。ペスタロッチ自身は、その哲學的才能の不足を告白してゐるけれども、その實彼には、獨特の仕方では哲學する才能があつたらうと思はれるので、彼れの告白をそのまま信じてはならない。成るほど彼は、慣例的の分析的哲學に汲々たるの風に於ては、零に近かつたけれども、しかも彼れのあらゆる著作が、如何にも彼にふさはしい分析的推論で充たされてゐるこ

とは、讀者の何人にも認められる。そこで當時の哲學者の頭目であつたヘルダー、フイヒテ、シェリング、ヘルバルト、フロエベル、ニコロヴィウス、ジイフェルン、シュタプ费尔、イッチ、グウル、ウナーの如き人々は、ペスタロッチの思想を考究して、それを更に一層分析的に明瞭ならしめることを試みた。カアル・リッターやヤコブ・シュタイナーの如きは、ペスタロッチの深い思想に基いて、全科學に新しい途を開くべく、前數者にも増した獨創的研究を怠らなかつた。かやうに當時の學者たちは、彼を哲學者扱ひにしたのである。といふのは、一に當時が哲學的時代であつたからといふ理由に歸すべきであらう。しかも世の常に哲學者らしからぬ彼としては、いはゆる哲學的な何物をも提供することは出来なかつた。それに次いだ非哲學的時代に於て、彼れのうちに何等の哲學を發見し得なかつたのは、不思議ではない。その後吾々の時代になつて、再び哲學に關心するものが多くなり、それと共にペスタロッチが哲學する人たちから當然受けて然るべき注意と尊敬とを受けることになつたのである。

以上はナトルプに大體據つたものであるが、(註一)彼は更にペスタロッチの教育説が哲學の基礎の上に立つてゐるのは疑ひないとしても、その哲學が如何なるもの

であるかを純粹に描き出すことは、極めてむづかしいことである、といつてゐる。私も實際さう思ふ。たゞナトルプであればこそ、かなりの確な總括的スケッチをなし得たのであらう。ペスタロッチのいふところに一字一句注意して、論理的關聯に於てするよりも、ありのまゝの關聯に於て、ばらばらの思想を一つに纏めるべく力めれば、どうにか彼れの思想を、立て直す如きことなしに濟むであらうが、動もすると彼れの思想をそのまゝ、純粹に描き出すといふよりも、立て直す如き危険に陥り易いことが感ぜられる。

三

然らばペスタロッチの教育哲學に於ける根本原理とは何であるか。こゝでも私は先づナトルプの叙述に従ひ、徐々に諸家の説や私の所見を加へてその本質を明かにすることを試みようと思ふ。

ペスタロッチの教育哲學に、唯一の原理があるか、それとも原理の統一があるかは、豫め考へて置く必要がある。形而上學は屢、唯一の原理若くは唯一の豫想の下に

立つものゝ如くいはれたのであるが、大きな川の流れは、決して唯一の源から發するものではないことを知らなければならぬ。けれども凡ての思想の要素を結合する思想の契機の下に唯一の強固な關聯の成立つ場合に、原理の統一といふことがいはれ得ないことではない。この意味での原理の統一が、ベスタロッチの教育哲學に存するのである。彼がそれをいひあらはすべく好んで用ゐた語は、ルソウの警語であつた「自然」といふ語である。即ち彼は自然といふ語を以て自己の原理の統一を示したといつていい。勿論彼はこの語を時に頗る不用意に不決定的に用ゐたことがないではない。自然の進行といふことを、彼は先づ自分の子供（ヤコブ）の教育に於て跡づけようとした。「隱者の夕暮」に於ては「自然の書物」なるものを、何より大切なるものとなし、自然といふ語に重要な意味を含めた。それ以來、この語は彼れの著作の全部を通じて愛用された。最初はルソウの影響ともいへるが、次第に彼自身の確信によつてこの語を使用することになつた。ニイデラーの意見に共鳴して彼れの原理を述べた「レンツブルグ講話」（一八一〇年）（一八一〇年）の中にも、彼れの自然觀を窺ふことが出来るけれども、それにも遂に不満を感ずるやうになり、或る

書物の中では、「教育の合自然性」(Naturgemäßheit der Erziehung) といふ語を用ゐて、それが彼れの原理の全體をいひあらはすに足るものと考へるやうになつた。さうしてこの教育の合自然性といふ概念は、最後に「白鳥の歌」に於ける基調となつて、彼れの晩年の教育説の歸趨を示すことになつた。

教育の合自然性といふ概念こそ、彼にとつての根本原理であり、これによる陶冶が正しき根本陶冶である。各個の教育教授が、もしこの合自然性、正しき根本陶冶を期することなしに行はれたとすれば、一部分を目當てにして全體を忘れたものである。本當の意味での人の陶冶といふ概念に忠實ならざるものである。教育の全體の本質に觸れざるものである。教育の最初の根源に立ち戻らざるものである。あらゆる教育手段竝に教育施設の結合といふこと、吾々のあらゆる力がいつも従はねばならぬ自然的進行の法則といふこと、教育によつて開展されねばならぬ個人々々の特殊の位置や状態といふこと、すべてそれ等に合致せざるものである。實に合自然性といふ命題こそ最も根本的なものであつて、それから五つの原理を派生せしめようといふのが、ペスタロッチの最初からの企圖である。吾々は

それ等の五つの原理の各につき詳しく知らんと欲するのであるが、今その概要だけでも述べて置くのが都合がいゝであらう。先づあらゆる陶冶は、被教育者自身の力から發足し自然の進行を辿りながらその力が發展するといふこと、それは陶冶の自發性の原理 (Prinzip der Spontaneität der Bildung) と名づけられるべきものである。次に人の精神の自己發展は、方法的進行を経て行くといふこと、いひ換へれば自然の進行が永久的法則に従つて進み行くといふこと、更にいひ換へれば眞の要素的なもの、根本的なものから、絶えず教育對象の全體、全本質へと統制されながら進み行くといふこと、それは方法の原理 (Prinzip der Methode) と名づけられるべきものである。第三に以上の二つの豫想によつて條件づけられる陶冶の事實 (Tatcharakter) 即ち直觀のはたらきの存するといふこと、別の語でいへば、不思議な力が個人々々の地位、境遇に應じて特異な姿を帯びながら生動するといふこと (何故に不思議な力であるかは後に述べる)、それは直觀の原理 (Prinzip der Anschauung) と名づけられるべきものである。以上の三原理は、陶冶過程にも必ず適用されねばならぬところのものであるが、更に第四に陶冶過程が種々様々な方面、方向へ分岐することに對

する原理が立てられねばならない。ペスタロッチは好んでそれを人の力の平均して調和的に發展する原理(Prinzip der gleichmässigen, harmonischen Entfaltung der menschlichen Kräfte)と名づけた。こゝにいふ力とは、彼が通常「頭と心と手」のはたらきとしていひあらはしたところのものである。然るにこの第四の命題は、人のすべての力が最後の共通の法則に従ひ、嚴密に結合し、互に内的一致を保ちながら發展するといふ意味をも含ませている。吾々はペスタロッチが或る場所でその命題を「力の平均の原理」(Prinzip des Gleichgewichts der Kräfte)と名づけてゐることを承知する。以上第四まで算へられた諸原理は、孰れも、陶冶さるべき各個人に關係すべきものなのであるが、然るにあらゆる教育作用は、社會を土臺にして築き上げられねばならない。そこで第五の究極原理として「協同體の原理」(Prinzip der Gemeinschaft)の立てられるのが當然である。それは前に述べた「個人々々の地位、境遇に應じて」といふことに關係すること深く、一切の教育作用が人の協同體のうちに於てのみ行はれることを意味する。

かくの如く見て來ると、ペスタロッチの教育學に於ける根本原理「合自然性」といふ

ことは以上の五つの派生原理によつていひ換へられてゐることがわかる。これ等の派生原理が、彼れの教育思想の本質的なものを基礎づけるのに、絶對的に必要であり、且つ十分であるとされるのである。今これ等の派生原理を要約していへば、(一)自發性の原理、(二)方法の原理、(三)直觀の原理、(四)力の平均の原理、(五)協同體の原理である。これ等の五原理は互に關聯するものであり、互に充足するものであり、かくして根本原理としての合自然性の原理に寸隙なからしめるものである。以下その一々につき詳密なる考察を進めたいのであるが、今度のこの論文に於ては、あまり長くなる恐れがあるから、「自發性の原理」と「直觀の原理」とを取扱ふにとどめて置かうと思ふ。

四、自發性の原理

蓋し自發性の原理とは、人のあらゆる陶冶は、つまるところ、人の力の自己發展であつて、外部から、事物から、他人から、或る形式を授與することでも印刻することでもないといふことを意味する。事物は、人によつて加工さるべきものに外ならず、

他人の助力指導は、自助に對する助力であるに過ぎない。

ナトルプのいふ通り、(註二)この見解は、既にルソウの自然觀の中にも含まれてゐる。ルソウにとつては、陶冶はすべて本質的には自然の内部からの發展 (Développement interne) でなければならぬ。ルソウの自然觀は、ヘブディングのいつてゐるやうに、(註三) (一)神學的概念、(二)博物學的概念、(三)心理學的概念の孰れかを意味し、それ等の概念は、彼れの著作の到る處で混用されてゐる。第一のものは、偉大なる單純 (majestueuse simplicité)、神ながらの自然狀態を指し、第二のものは、原始的狀態 (l'état primitif) 前社會的自然狀態を示すものである。ところが彼れの教育思想の基調をなすものとして明かに定義されてゐるのは、第三の心理學的概念のみであることは、デュルルメエトルの確言してゐる如くであつて、心理學的概念といふのは、人の本能的要求乃至傾向を以て自然狀態と看做すところのものである。(註四) ベスタロッチにあつても、ルソウから影響されたことを如實に語るものの如く、その自然觀が、ルソウと同じやうな三様の概念の孰れかに重きを置いて説かれてゐる場合が尠くないのであるが、しかし矢張り心理學的概念を以てその教育原理を基礎づけ

てゐることは、疑ふべからざる事實である。

心理學的概念であるところの自然、即ち人の本能的要求乃至傾向が、内部からの自己發展をするといふこと、こゝにルソウにとつてもペスタロッチにとつても自己發展の原理が立てられるのであるが、兩者は、その自己發展を譬へて、櫨の實が櫨の樹に生長するの類であるとし、植物の生長が生そのものゝ原理によるの外はないやうに、人の自然の自己發展もまた生そのものゝ原理に基かざるを得ないと考へる。

『吾々の自然の力は、抑止すべからざる内的衝動によつて、斷えず發展して行く。』のであるから、教師の術は、園丁の術の如くであるべきで、教師の仕事は、神のみの知る子供の生長をたゞ外的に培ふ外には何物もない。けれども種子がその生長に適しない地面に播かれることがあると同様に、子供もその發展に不都合な環境に置かれることがあり得る。かゝる場合、子供が怠惰になり、無智になり、迂濶になり、傍若無人になつて、社會のために無用危険な厄介者となるのも致方はない。かゝる場合に立ち至らしめないやうに豫め注意してやるのが、先輩たるものゝ任務で

なければならぬ。して見れば、子供の環境の選擇といふことは、教育の任務として消極的ではあるが、極めて大切なことである。ルソウはこの考をあまりに極端につきつめて、遂に一切の社會的環境から子供を遠ざけることを教育の最良條件としたのであるが、ペスタロッチは、生活は人を作る(『das Leben bilden』)ことを一面の有力な眞理と認めて、選擇されたる社會的環境を教育の最良手段の一と看做し、かの「協同體の原理」なるものを立てた點で、ルソウから全く異つてゐるのである。かくの如き相違はあるにしても、兩者は共に、自然そのものに「區別し、選擇し、向上して、瞬間的なものを永久的なものへ轉換させることの出来る」内的な自己發展の可能性、即ち自發性の原理の横はることを確信したのである。

多くの教育史家は、ルソウを自然主義者だとするのであるが、モオグが「ルソウは既に個人主義と自然主義とを結合せんとした。しかし彼れの自然主義は、單なる經驗的現實性ではなく、實有ではなくして、理想的價值を意味する。」(註五)といつてゐるのに、私は同意したい。その理由は多々あるが、「エミール」にあらはれた自然觀について見ても、ルソウが單なる感性的自然のみを高調したとはどうしても思は

れない。正しきを愛する良心、正しきを認める理性、正しきを選ぶ自由が、自然の内
 部からおのづから発展し來ることを、彼が「エミール」の到る處で繰り返し述べてゐ
 るといふ事實は、何人も否定出來ないのであらう。彼は自然の力をただいつまで
 も下位にある無價値な感性的な力と看做したのではなく、それはやがて價値の世
 界の向上發展し得る可能性の所有者であることを深く信じてゐたやうである。
 果して然らば、彼は實に自然主義者の假面を装ふ理想主義者であつたといへる。
 けれども彼は、それにも拘らず、自然の向上發展の *Massstab* については何等考へ及
 ぶところがなく、またそれを必要ともせずして、單なる *natürliche Ordnung* としての
 自然の向上發展、若くは感性的自然と理性的自然とが *prästabilierte Harmonie* を保つ
 ものゝ如く解したのであつて、この點からすれば、彼が自然主義者の中に算へられ
 るのは、一理あることである。これに反して、ペスタロッチは眞の *natürliche Ordnung*
 は、*soziale Ordnung* を經て行かねばならない、*Bildungsgemeinschaft* をたよりにして
 行かねばならない、その結果として自然の理想的向上發展があり得ることを説く。
 單なる自然的秩序や感性的自然と理性的自然との豫定調和の如きものは、ペスタ

ロッテにとつては全く空想に過ぎないのであつて、自然に對する社會的法則性の力の及ぶところに、自然の理想的向上發展があり、またそこに教育の事實が存するのである。教育は、下位の自然状態に、上位の自然状態があらはれて來るときに行はれるものであつて、勿論それは壓迫や強制の如き外的法則性から實現するものではないにしても、眞、善、美、聖を代表する社會的法則性のはたらきかけるときに發生するものである。ペスタロッチはかく見るのであるから、彼こそルソウよりは遙に嚴密な意味での理想主義者でなければならぬ。(註六)

ルソウとペスタロッチとの比較に於ては、ペスタロッチが自然の理想的向上發展に對して社會的法則性を認めることを指摘するのが、最も本質的なことであるが、さればとてペスタロッチが、自然の理想的向上發展の過程に自然の自己法則性を無視したのではない。否、自然の自己法則性こそ、最初から最終まで存続しなければならぬものであつて、社會的法則性は寧ろ通過すべき段階(Durchgangsstufe)であるにとどまるのである。ペスタロッチにとつては、人を陶冶する自然といふのは、人自身の有する自然でなければならぬ。人がその本質を独自の法則によつて陶冶す

るところのものを、自然と見るべく外部の事情によつて如何様にも變化するやうな、あやふやな、従つてやがては克服されなければならぬやうなものを以て、自然と見るのではない。それであるから人が自己特有の法則によつて自己を陶冶するといふ意味での自律、自己立法 (Autonomie, Selbstgesetzgebung) なるものが、自然には徹頭徹尾存続すべきものである。かゝる自然乃至自發性を陶冶原理とするとき、それは著しく道德的であつて、自律の陶冶原理 (Prinzip der Autonomie) ともいひ得べきである。

ペスタロッチは自分の子供を教育するに當つても、出来るだけ多く自分自身でさせ、自分自身で發見させようとした。そこで彼はいつてゐる、教育者の知らねばならぬことは、自然の方が人よりも一層よく子供を教育するものだといふことである。と。さうしてこの自然に自由を與へるといふことが、最も必要事であつて、自由の中に於てのみ教育は呼吸することが出来る。もし子供に服従を望む場合でも、それは自由に信賴してかゝらねばならない。「隱者の夕暮」の中にもかういふ語がある。「如何なる仕方、如何なる途を辿つて、私を助け、私の自然を完成向上せしめ

る眞理を發見し得るであらうか。蓋しこの眞理の説明は私の自然の内部に聞くの外はない。あらゆる人間性はその本質に於ては同様であつて、それを満足させる途は唯一である。吾々の本質の最も内部から純粹に作り出されて來る眞理こそ、一般的の眞理である。……すべての純粹な人間性の力は、單なる技術や偶然性から恵まれるものではない。それはあらゆる人の自然の最も奥深きところにその基礎を置くところのものである。』こゝにいふ自然なるものは、明かに自發性とか自律性とかいふべきものである。しかもそれは特殊の個人乃至特殊の社會の恣意若くは技巧に屬するものではない。さればとて人以外の所有にかゝるものでもない。これに反してそれは人の內的創造力のあらはれなのである。

「隱者の夕暮」の中では、自發性(自然)の原理を以上の如く説明すると同時に、この見解を基礎として、人間陶冶の一般性といふことを述べてある。一般性といふのは二様の意味に於てである。即ち「人間的な」——人の本質である「自然」からして行はれる——陶冶が、内容的に連繫するといふ意味が一つであり、かゝる陶冶が、人類のあらゆる方面に一般的に普及するといふ意味が他の一つである。人の內的な力

が陶冶されるといふからには、その陶冶はすべて誰にとつても共通であるところの共通であり得るところのものへ向つて行くのが當然である。人は各自その特殊の生活任務を有し、特殊の生活様式を立て、行くにしても、少くとも根本に於てはすべて共通な陶冶を受くべきものである。ペスタロッチはかう見るのであつて、人間陶冶の一般性といふ概念は、第一には主觀的に、人は各自の自然の内的な力を、内容的に連繫するやうに陶冶することを意味し、第二には客觀的に、あらゆる人がかゝる陶冶を共通になし得ることを意味する。この二様の意味を、彼は次の語でいひあらはしてゐる。「人の自然の内的な力が、純粹な人の智慧ワイスヘイトにまで、一般的に向の上るといふことは、最も程度の低い人の陶冶にも當筈まるところの、陶冶の一般的目的である。」これに反して、特殊の陶冶といふことも豫想されねばならない。そこで彼は、「人の特殊の地位境遇に應じて、その力が練習され、應用され、使用されるといふことは、職業陶冶であり、階級陶冶である。これは常に人間陶冶の一般的目的に従屬すべきものである。」といつてゐる。蓋し、「内的な力の陶冶されない人にあつては、その手近かな決定をするにも、その特殊の地位に應ずるにも、共に必

要な陶冶の基礎が缺けてゐるのである。』

自發性(自然)の原理は、「ラインハルトとガートルウド」の中にも述べてあつて、隱者の夕暮よりも一層複雑になつてゐる。第一に氣の付くことは、一般的陶冶と職業的陶冶とが、全く相容れないものゝ如く示されてゐるといふことである。しかし、よく考へて見ると、さうでないことがわかる。「境遇は人を作る」といふ語が、表面に出てるて、職業的陶冶に重きを置かれてゐるやうに見えるけれども、實はこれに反して、人はまた境遇を作るといふ意味もいひあらはされてゐるので、一般的陶冶の必要についても、十分に認められてゐるのである。ペスタロッチによつて、ルソウの自然の意味が一層社會化され、哲學化されたことは、前にも述べた通りであるが、人は生れながらでは、自然によつては、善でもなく、理性的でもないので、社會なるものが、自然の全くなし得ないところのものを、人から作り上げなければならぬ。ペスタロッチの考では、「人をその最も内的なものに於て變化せしむる順應、慣習、教育、法則等を以てして、人の自然の最初の衝動と戰ふところの秩序の軌道の中へ導き入れるところのもの」が、社會に外ならない。「しかし、人の自然を深く知つてゐる立

法者の智慧のみが、人がその市民生活に處し、職業上の任務を果して行く上に於て、その自然の内的なものを満足させる進路を發見するに至らしめることを要求する。人の自然と一致する陶冶により、且つ市民的決定を賢明になし得るやうに指導することによつて、人が人としてこの世にあるべき最高のものに向して行くこと位いふことはない。』ペスタロッチはかく見て、一般的陶冶と特殊的陶冶との相俟つて行はるべきことを主張する。また自然が社會によつてその生長を正しく導くべきことを希望する。自然の自己法則性の理想的向上發展のためには、社會的法則性の缺くべからざることを要求するのである。

自然の自己法則性と社會的法則性との關係についての問題は、ペスタロッチ自身の提出するところのものであつて、前にも言及して置いたのであるが、この問題を更に進んで考究するためには、再び彼れの自然觀の區々の姿を一瞥する必要がある。彼はルソウと同じく、氣儘に粗野に生長する單なる衝動本質としての自然人を假定して、人の自然の最初の衝動といふやうな語を用ゐてゐるかと思ふと、それとは反對に、人の自然の内的なものなどといつて、感性的自然でないところの理性

的、道德的、自然の如きものを意味してゐる。さうしてこの自然の方が、人の本質として、はより以上のものであると考へてゐる。かくして人の二種類が區別されて、甲は瞬間なるものに浮草の如く身を委ねる人であり、乙は「瞬間なるものに持続性を與へ」、「區別し選擇し方向づける」人だとされてゐる。同じ人でもこの二方面が豫想されてゐる。普通の道德や慣習が、人の粗野な性質に對して嚴しい強制となるやうに、經濟や法律の秩序なるものも、人のより高き自然を生み出すのに役立つものである。ところがこの状態はまだ他律の強制であり、外的立法であつて、理想的最高状態に達すると、全くそれとは異り、自律となり、自己立法となつて行く。この他律から自律への發展が、人に於ける人の教育であり、單なる衝動的、本質から理性的、本質への教育である。かくして「ラインハルトとガートルウド」の中に述べてある社會的教育なるものは、人間陶冶の外的要素として職業的勞作を必要とし、また一切の社會的秩序をも必要としてゐながら、それ等は結局各個人ゼルフストルルゲの自助、解放のために役立つべきものである。職業的勞作と社會的活動とは、人の自己活動を促進させるといふ點に於てのみ重んぜらるべきものである。自然の自己法則性と

社會的法則性との關係は、かくの如く見らるべきだといふのである。『國家の強大は、一にその成員が、自分自身を支持するに足る餘地と力と刺戟とを、その身體と精神とに於て見出し得るといふ點に存する。』故に『人が他人から助けられる如きことがあつてはならない。全き自然と全き歴史とは、各個人が自助を心掛けて、人に助けられるでもなく、人を助けるでもなかれかしと要求する。人に對する教として最もいふことは、自分自身でなすといふことを人に教へることである。』クリストフとエルゼ（一七三八年）に於ては、各階級の自助といふことについて述べてあるが、この各階級の自助があつて、初めて各階級の間（一七三八年）に正しい對立的關係が保持されるものと見られてゐる。

自發性の原理なるものは、自然についての以上の如き二つの意味に關係して考へられると同時に、人の道德力といふことを立説せしめ得る原理となるのである。このことは上記の著作に於て明かである以上に、人の發展に於ける自然の進行についての予の研究によると、更に明かになつて來る。こゝでは、根本の見解に於てカントと一致し、道德的本質としての人は、自分自身の製作物であり、自分自身法則

を與へるものであり、かゝる自律、道德的自由を有する所から、人は外的目的に對する手段としてでなく、自己目的として尊ばれねばならない。そこで最も低い感性的自然は、社會的生活によつて抑制されると共に、第三の状態である純粹な道德的狀態にまで進まなければならぬ。かう考へられて來るのである。いひ換へればアノミイヘトロノミイ、アストロノミイ無法則、他律、自律の三状態、更にいひ換へれば單なる束の間の衝動の無法則と、たゞ外的に拘束する社會の法則と、自己の道德的意識の内的結合である法則との三状態が考へられて來るのである。これ等の三状態に於ける法則は、すべて人自身の自然の法則に外ならぬのであるが、各々特殊の方向をとつてあらはれるのである。第二の社會的狀態であつても、人自身の發展の一定段階、いはば約フエアトラフケ、フエア東、卑下コムニスの状態である。人の「作られる」のに與つて力のある環境を「作る」ものは誰かといふに、やはり人自身である。權威の上に成立つ積極的な正不正、對立的な義務、その他のあらゆる社會生活上の形式は、一體誰の作るものかといふに、それもやはり人自身の作るものである。さうしてそれ等の存する限り、人に對して非常な力を及ぼし、人のより高い道德的自然的發展を妨げること、恰もそれ等が人の粗野な感性

的自然を傷け抑制すると同じき趣きがある。けれどもそれ等はまた、人の道德的
自然を變化させ、更によりよきものに、更に純粹な發展にまで導くに當つても、缺く
べからざるものである。

ペスタロッチはかくして結局第三の道德的自然なるものを發展の極致と考へる。
彼はかういつてゐる。「人は單に自己満足に終る感性的なもの、上にいつまでも
立つことは出来ないもので、それ以上に自己を高めるか、それ以下に自己を墮落せ
しめるかするものである。人は本能に對して自己の反省や思想を優越なものた
らしめる力を有する。自己が自己に與へる法則に服從して、吾々の知るすべての
もの、前に儼然と自己を際立たしめる。」と。人の道德的力が、低い動物的な衝動
的な乃至「社會的」な自然から全く獨立するといふことは、つまりペスタロッチにとつ
ては、人が自己を宗教のうちを示すといふことに外ならない。そこで宗教は道德
的自然である自律の意味に於てしか解されない。宗教は人を離れた何物でもな
い。人自身の作り出すものである。「或る神を畏敬するといふのは、人が正しく行
ふことが實際に出来るからのことである。」ペスタロッチから見ると、宗教の本質な

るものは、『私自身の真理と本質とを、私自身が内的に判断すること、そのことに外ならない。』いひ換へれば、『私の自然の神らしき閃光であり、私自身を導き、罪し、赦す私の方であるの外はない。』『ラインハルトとガートルウド』の中でも次の如くいつてゐる。『人が自ら現在ある通りの人を知る限りに於て、人は神を知る。』と。『隠者の夕暮』の中でも、『神は人と最も近い関係にあるものである。』『汝自身を信ぜよ、汝の本質の内的意味を信ぜよ、かくして汝は神と永生とを信ずることが出来る。』『神を信ずることは、人を純粹に陶冶することへの自然の成行である。』神なるものは、『人の本質のうちに横はるものである。善惡についての感のやうに、正不正についての消え失せ難き感情のやうに、神なるものは、人間陶冶の基礎として、吾々の自然の内部に、不變の姿で儼存するものである。』

宗教についてのペスタロッチの見解は、凡そかくの如きものであるが、彼は何事をも徳性の基礎の上に置かうとしたので、人間陶冶の純粹な、内的な、自律的な基礎なるものをも、徳性の基礎と同一視した。こゝがプラトオやカントと説を一にする点と見られる点である。

五

以上述べて来たところによつて明かなことは、ペスタロッチの自發性の原理は、自然の理想的向上發展の極致としての道德的認識と道德的自由とを期待する。いひ換へれば徳性の基礎を自然そのものゝうちに豫想するといふ點である。然るにペスタロッチは、自發性の原理を以てかくの如き道德的原理たらしむるのみで満足したのではない。自然の理想的向上發展の極致としての知識的自由を期待し、悟性の基礎を自然そのものゝうちに豫想するものもまた、自發性の原理であるとした。このことは、人類の發展に於ける自然の進行についての予の研究の中では特に力説されてゐる。道德的認識と悟性的認識とは、共にその基礎を自然の全我のはたらしきのうちに豫想されなければならぬこと、人の道德的自然と精神的自然とは、案外嚴密に統一されなければならぬこと、かゝる見方は、ガートルウドは如何にその子を教ふるか（一八一五年）第十書翰に於ても、その他の著作に於ても、到る處にあらはれてゐるところのものである。

『予は教授を心理學的になさうと思ふ。しかしそのことは精神がその雑多の感覺的經驗を、明確な一般的觀念に作り上げるときに必要な永久的法則と相俟つて、教授を遂行するのでなければ、到底不可能である。』この永久的法則の何であるかは、^ゴガートルウドは如何にその子を教ふるかにも、白鳥の歌にも屢述べてある。この永久的法則なるものは、要するに吾々が道德的人格たり得る基礎を自然そのものうちに、いひ換へれば吾々自身のうち^に有することを意味すると同時に、吾々が適當の機會に於て、不斷に變化して止まぬ時々の經驗に全我を集中するのよるこびを味ひながら、渾沌の中に統一を發見し、かくして知識的にも向上發展をなし得ることを意味するのである。別の語でいへば、吾々の悟性の基礎を吾々自身のうちに見出すことを意味するのである。もし教育者がその子弟の知識的發展の法則を、子弟の自然そのものうちに求めることをしないで、なまじひに他律的な方法を以てするならば、子弟を精神的に退步せしむるの外はない。もし兩親がその子の一舉一動、一言一語を、ただ他律的に教へ得るものと思ふならば、大きな誤りであつて、それ等の悉くが子供の内の生活の表現でないものはないことを知らね

ばならない。それを知るに及んで、よろこび何にか譬へられよう。よき母親ガートルウドの如きは、子供の一切の表現を子供自身の立場から眺めるのに、世の常の教師の如きは、子供に提供する問題の方面から吟味しようとする。一は子供の主観から、他は大人の客観から出發しようとする。子供の要求、子供の活動等に愛の眼を注ぐ母親の態度に比して、すべてを大人の理解若くは誤解からして處理しようとする教師の態度のつまらないものであることは、言を俟たないところである。蓋し自發性の原理のみが、子供の知識的發展を可能ならしむるものである。

自發性の原理が、かくの如く知識的に解されるのは、ペスタロッチが自律の思想を、單に道德的範圍に限らないで、精神的範圍へも推し及ぼしてゐるからである。彼はスタンツやプルグドルフで貧兒達を教育するに當り、經濟的その他の外的救済のみによつてでなく、先づ彼等の内的なものを目覺まし生かす必要がある。然らば彼等はやがて外的なことに對しても同様に活動的になり、注意深くもなり、慈悲深くもなり、服從的にもなることを知つたのであつた。『先づ内的なものを純化せよ。』といふキリストの教はまたペスタロッチの教でもあつた。然るにこの「内的」の意味

は、彼にとつては、道德的範圍から直ちに認識全體の範圍にも考へ及ぼされたのであつた。彼によつて初めて正しく高調された「直觀」の概念の生れたのも實にここにいはれが存するのである。

六

しかしながら自發性の原理は、常に道德的、知識的の兩範圍に關説されたものではない。技術的の方面にも自發性の原理を當筈めようとしたのが、ペスタロッチの眞意であるやうに思はれる。彼から見ると、數形語に於てあらはれる内的な「直觀」のABCなるものが考へられると同様に、矢張り内的な「技術」のABCなるものが認められねばならない。形成された精神と精練された心情とが、あらゆる人になくてはならぬと共に、それ等の心的能力と關係するところの深い熟練への陶冶といふことが、また極めて必要である。しかもこの陶冶は、技術のABCともいふべき根本的機制を基礎としなければならぬ。とはいへそれは求めずして發見されるものではない。世に求めずして發見されるものゝないのは、當然である。し

かしそれを求める以上は容易に發見することが出来る。實に人の最も複雑な熟練の根柢となり、進んでは精神的、道德的の初步陶冶にも貢獻するところの尠くない「技術のABC」なるもの、殊に打つたり、運んだり、投げたり、押したり、引いたり、廻したり、捻ぢつたり、揺ぶつたりする身體力の極めて單純な發表は、單純であるが故におろそかにさるべきものではない。生來人に具はる活動衝動の教育的意義は、洵に大なるものである。(「ガートルウドは如何にその子を教ふるか」第十二書翰)。この意味での技術的自發性の原理は、「白鳥の歌」の各所にも明かに述べてある。曰く、吾々の技術力の部分陶冶は、生れながらの活動衝動から出發すべきである、それは丁度、吾々の知識や品性の初步陶冶が、同じ活動衝動に基づかねばならぬやうに。人はもともとすべての能力を實地に應用したく期するものである。感官でも手足でも、出来るだけ多方面に應用したいと冀ふものである。この欲求は、人性の最も奥深く横はるもので、それを導き出す外的機縁の必要なことは無論であるけれども、しかし後者はどこまでも外的な、第二次的なものたるにとどまる。何物かを描かうとする子供の手から畫筆を奪ひとつて、大人の巧みさを示さうとするの愚

は、須く捨てなければならぬ。子供ながらに何物かを描かうとする、そこに彼れの技術力の最初の芽生がある、已み難き彼れの技術的欲求がある。それをはぐくむべく、彼れの意のままに描かせなければならぬ。意のままになることもあり、ならぬこともある。意のままにならぬことを彼が訴へ出たときに始めて助力を與へるのが、先輩たるものゝ任務であつて、これだけの用意のあるところに、技術的自發性の原理が正しく承認されたことになる。ペスタロッチのいはゆる技術的自發性の原理は以上の如きものであつて、この原理からして彼れの勞作教育思想が生れるのであるが、このことについては今度のこの論文に於ては述べる餘裕も必要もない。

七、直觀の原理

私は以上の所説によつて、自發性の原理なるものゝ内容本質を考察したのであるが、次に直觀の原理なるものが何を意味するかを檢討し、この原理が教育思想上に如何なる位置を占めるかを見たいと思ふ。悟性の基礎を自然そのものゝ中に

認めるものが、知識的自發性の原理であつて、この原理の上に立つて「直觀」の概念が正解されるといふペスタロッチの見方については、既に一言して置いたのであるが、然らば知識的自發性の原理と直觀の原理との關係如何。蓋し直觀は、或る對象を豫想する心のはたらきであつて、この心のはたらきは、決して他から與へられるものではなく、内的な、自發的な、能動的なものであるといふのが、ペスタロッチのいはんと欲する眼目である。或る對象に對する心のはたらきの、知識的方面の基礎たるものを直觀と認めて、直觀の實質原理が立てられ、人のあらゆる陶冶は（従つて知識的陶冶も）、人自身から行はれるものであるといふ、陶冶の進行の一般的法則を示す形式原理として自發性の（従つて知識的自發性の）原理が立てられるのである。かくして知識的自發性の原理は直觀の原理の中に含まれる論理的豫想であつて、知識的自發性は直觀から抽象されてのみ考へられるものである。生きた現實に於ては、直觀の中に知識的自發性が存すると見らるべきものである。「初めに行動ありき」とは、知識的方面についてもいひ得られることである。

ペスタロッチに従へば、人の本質は究極の中心點——「汝の全き實在の中心點」に還

元される。『この中心點なるものは、汝自身である。』汝があるところの、汝が欲するところの、汝があらねばならぬところの、すべてのもものは、汝自身から發する』（備忘録）（*Alles, was du bist, alles, was du willst, alles, was du sollst, geht von dir selber aus.*）からである。こゝでいふ汝自身といふことは、純粹自我といふこと、カントの意味での先驗的統覺といふことだとは見られない。とはいへそれが感性的方面に即してのみ考へられてはならない。實にそれは、人の感性的精神的自然の、また人の精神的感性的自然のそれ自身に於て分つべからざる全體といふ意味を有する。『自己認識なるものが中心點であつて、そこからして全體としての人の教授の本質が流れ出て來なければならぬ。しかしこの自己認識なるものは、その本質から見て、二つの意味にとれる。第一は、私の物的自然についての認識であり、第二は、私の内的自立性についての認識である。私の意志の——私の本務の認識である。』従つて第二は、吾々の道德的自律性の認識である。ところが「ガートルウ」第四書翰の末尾では、「備忘録」の語を繰返して次の如く述べてある。即ち「私があるところの、私が欲するところの、私のあらねばならぬところの、すべてのもものは、私自身から發す

る。して見れば、私の認識なるものも、私自身から發しない筈はない。』と。かくして道徳的認識の自己法則性が、悟性的認識のそれに置き換へられてゐる。ペスタロッチは「備忘録」に於けるやうに、こゝでも、自己を陶冶する精神の自己發展なるものを、樹木の生長に譬へて説く。樹木の種子から幹や枝が延びて來るやうに、あらゆる教授は、各認識材料の本質を『人の精神の本質に深く掘り下げなければならぬ。』と。ペスタロッチはかくの如く見て、直觀乃至悟性の自發性が、人の精神的感性的自然のうちに、また人の感性的精神的自然のうちに、本源的に隠されてあるのを發見すべく力めなければならぬことを主張するのである。

ペスタロッチが直觀の三要素と稱するもの即ち數形語が、如何なる意味のものであるかを明かにすれば、彼れの直觀の原理の意味もまた自ら明かになるであらう。試みにモオグの解説によれば、ペスタロッチのいはゆる直觀の三要素は極めて論理的なものとなつて來る。(註七)曰く、人は對象に對して、それが如何に多く、如何なる形を具へ、如何に名づけらるべきかを知らうとする。そのためには (1) *Zahlkraft*, (2) *Formkraft*, (3) *Sprachkraft* のはたらくことが、先決要件である。明瞭な認識の獲得

されるためには、對象の統一と形式と命名とが先づ意識されなければならない。對象を統一として規定し、それを形式として限定し、それを命名することを以て終る *Bestimmtheit, Klarheit, Deutlichkeit* の三段階を経て行かなければならない。この三段階を経て行く直觀の過程が基礎となつて、始めて明瞭な認識が獲得される。悟性の陶冶はこの直觀の過程の發展である。ペスタロッチのいはゆる「直觀の A B C」とは、蓋し數形語の三段階が、不明瞭な單なる直觀から區別され、悟性の基礎たるべきことを意味するのである。姑らくこの解説に従へば、ペスタロッチは如何にも論理的確實性に富める頭腦の持主の如く見えるのであるが、その實、彼れの所説には幾多の曖昧が藏されてゐるので、それを明かにせんとすればするほど、解説者の我田引水に歸するを免かれない。そこで、彼と同時代の人々の中には、彼れの「直觀」はカントに於ける「先驗」の意味に外ならないといふものがあり、近くはナトルプの如きも、彼をカントに酷似せるものとしてゐる。

今こゝにナトルプのいふところを約説すれば次の如くである。(註八) ペスタロッチが數形語の三要素は「前認識」(*Vorkennntnisse*)だといひ、あらゆる他の對象認識は、

それに依立することを説くのは、彼がその先驗的性質を認めるからである。子供は早くから圓いものや四角なものを、圓いものであり四角なものであると命名するのみならず、殆ど前々から圓いとか四角なとか統一とかの概念を、純粹の抽象概念として自己に印銘しないとも限らない。従つて子供が自然に於て、圓いとか、四角なとか、單一とか、數多とかに認め得るものに接する場合、この概念の普遍性を示すところの一定の語を以て、それを統べくすることが出来る、かうペスタロッチ自身がいつてゐるではないか。彼がカントのいはゆる普遍性と必然性とを高調したことは、疑ひのない事實である。吾々の直觀は、その本源的法則によつて、あらゆる可能な形式についての直觀の全系列を發展させ、その本源性からして、嚴密な合法的進行を辿つて、次第に自己を「生産する」ものである。かうした重要な命題が、普遍的なものとして、また必然的なものとして許されるのであるが、とにかくこの直觀の發展過程が、彼によつて「直觀のA B C」と稱されるので、それはカントが現象を「經驗として讀み得るためには、それを「先驗」の根據に基いて「綴る」必要がある」といつた意味と本質上同様のことである。故に「直觀のA B C」を感性的知覺の發展過

程と見て、直観は印象を外部から受身的に受容するはたらしきだといふならば、ペスタロッチの原理を全く曲解することになる。彼は「ガートルウド」の第十、第十一書翰に於て、『個々のそれ自身としての直観なるものは、対象が單に感官の前に映ずる (das blosse Vor-den-Sinnen-stehen des Gegenstandes) といふことで、眞の直観とは相反するものである。蓋し「直観術」(Anschauungskunst) なるものは、數や形についての吾々の表象を、單なる受身的な受容の段階以上に高めようとする意味を有するものである。と明かに述べてゐる。『より純粹な悟性の進行が可能である。吾々の自然にとつては、認識のあらゆるゆるぎを、一定の眞理に高めることが可能である。直観そのものが、その單なる感性のゆるぎから脱して、それを私の本質の高い力の作品にまで、悟性の作品にまで作り上げることが可能である。』と述べてゐるのも、ペスタロッチがカントに著しく近似することを示す語である。また、人は道德的本質として、彼自身の作品であるとして「研究」の中でいつてゐるのも、少からずカント風の口吻である。ペスタロッチは當時の優れた人々、殊に數學家のヤコブ・シュタイナーから十分理會されてゐた。かくしてシュタイナーは、數學に於て、『人は自然に法則を與へ

る」といひ、對象直觀の法則を前以て規定することの出来る人の能力なるものは、空間の數學に於て先づあらはれるものであるといつて、ペスタロッチの原理を受継ぎ、カントの認識の理想主義と同じ主張をなしてゐるのである。

こゝまで述べて來た範圍でのナトルプの解説によると、ペスタロッチは徹頭徹尾カントと一致するものゝ如くである。然るにペスタロッチの直觀の原理は、直觀を以てカントの意味での先驗性と同一視するものでないことは、少しく思慮を密にすれば容易に發見し得られる點である。流石にナトルプもその所説を一步進めて、兩者の見解の異同を論じないでもない。彼が次の如く述べてゐるのでも、それはわかる。(註九)——直觀といふ語は、もともと、*Intuition* といふ語から出てゐる。

その意味は、精神の内觀 (*Innenblick*) である。受身的にまだ魂の内部に横はる知覺であるとか、或は内的な天啓をいはば單に受容するはたらきであるとか、少くとも靜觀といふ程の意味を有する。この *Intuition* といふ語の元の起りは、疑ひもなく、プラトオ風の「理會」の中にあつて、對象を能動的に觀る、本源的に觀るといふ意味にとられてゐたのであるが、中世期及び近世初期の *Intuitus* になると、その能動的意味

が殆ど失はれてしまつて、「理會」といふ語そのものが全く「表象」といふ語に當篋する位にまで氣の抜けたものとなつてしまつたと同様に、それもまた氣の抜けたものとなつてしまつた。然るにカントに至つて、「理會」の原意を取り戻すべく試みられたのであるが、しかし、「直觀」といふ語は、依然、少くとも本質的には、單に感性的のものとして、即ち單に受身的に感じられる性質 (Empfänglichkeit) として解された。純粹な直觀であつても、それ自身に特有な、受身的に感じられる性質を有するのみと見られ、直觀の自發性なるものが認められず、純粹な思惟からは取り除いて考へられた。ところがペスタロッチは、直觀に完全な自發性を認めると共に、カントを超越することになつた。さうして彼は、直觀といふ語に屢、感性的といふ語をさへ附け加へてゐる。しかも感性的といふことは、この場合、單なる受身的感受性を意味するのではなく、行動に向はんとする活動性を示す生々しさを十分にそのうちに含めてゐる。……かくして「感性的直觀」のうちに、陶冶の純粹な内的の力が横はり、その力から流れ出づる「方法」なるものが自ら生産されるに至ることは、ペスタロッチにとつて疑ふべからざる事實である。その力は、對象を現實的に構成する力であり、理

念としてもとも吾々のうちに内在するところのものを實現せんとする力である。また理念は、直觀に於て行動化して來るのであり、對象を眼に見えるやうに構成するのである。

ナトルプはかくの如く述べて、ペスタロッチがカントから離れて行く姿を見送るのであるが、しかもまた両者が互に接近し來ることを肯定してゐる。即ち彼はいふ、直觀は概念や原理に對して何等の對立關係にあるのではなく、寧ろそれは概念そのもの、原理そのもの、活動する状態であり、それ等が十分に行動化せんとする状態である。出來上つた構成ではなく、生々と構成することである。かくしてペスタロッチの直觀の概念は、カントの場合に於ける「思惟の綜合的機能」(synthetische Funktion des Denkens)に最も近い意味内容を有する。カントにとつては、それは直觀と密接に關係するもので、分析的機能であるところの思惟抽象からは、全く別のはたらしきである。それは直觀に依立するものとも見らるべく、本來創造的な認識力としては、直觀を豫想せずにはゐられない筈のものである、と。

ナトルプはかく論じながら、ペスタロッチの直觀の概念が確立されるに至らなか

つた頃の思想の動搖について述べ、結局ペスタロッチは直觀を悟性的、概念的なものと看做すところに落付いたといつてゐる。果してさうであらうか。蓋し「ペスタロッチの直觀の概念が確立されるに至らなかつた頃の思想の動搖」のうちに却てペスタロッチの眞意の全體が横はるのではなからうか。「直觀を悟性的、概念的なものと看做す」のは、却てペスタロッチの眞意の一面のみを物語るに過ぎないのではなからうか。

思ふにペスタロッチが直觀を悟性的、概念的なものと解するとき、悟性の本源性、獨創性を認めて、思惟の綜合的機能なるものをカントと共に意味したといふことは、ナトルプの見る通りであらうけれども、しかもまた彼れの直觀の原理は、少からず感情の方面を重視してゐるのである。直觀は悟性的、概念的である他の一面に於て感情的であると看做されたのではないか。直觀は論理的であると同時に心理的であると考へられたのではないか。従つて直觀は吾々の全經驗の本源的はたらしきであり、對象を感性的に把握するところから始まり、やがて感性的、精神的に、また精神的、感性的に把握するはたらしきであらねばならぬ、かうペスタロッチは解した

のではないか。如何に單純な心的活動にも、全精神が集中すべきで、教育者が子供に提供する材料は、如何に單純な感性的なものであつても、それが子供の心に單なる感覺として受身的に與へられるのではなく、それは必ず或る時、或る場所に於て能動的に知覺された、子供の心の生産物でなければならぬ。子供の心はそのとき、對象を我がものとして感じ且つ知つたのである。論理的にか心理的にか感知したのではなく、全人として感知したのである。そこには癡痺した大人の心の味ふべからざる程度の歡喜が湧くに違ひない。それと同時に、子供は身をも心をも打込んで實際活動を演ずるであらう。ペスタロッチの意味した直觀の原理なるものは、凡そかくの如く解さるべきであつて、彼が直觀を概念的、悟性的なものと看做すに終つたといふが如きは、未だ彼れの全豹を描き出したものといふことは出來ないであらう。それ故に私は、彼れの直觀の原理が確立されるに至らなかつた頃の思想の動搖のうちに、却て彼れの眞意の全體が横はるのではないかといふのである。

實際、彼にあつては種々の直觀の思想がさまざまに説かれてゐる。しかし詮じ

つめれば極めて常識的に、人の全経験を尊重せよ、そこに直観の教育的意義がある
と見られてゐる。一七七四年の「備忘録」では、視る、聴く、爲す」といふはたらきを、分析
的判斷と對立させて、子供には自ら爲さしめ、自ら發見せしめ、日常の行動によつて
自己の概念を作り上げしめなければならぬといひ、視る」といふことは「直観」である
といつてゐる。「隱者の夕暮」の中でも、「精神が思ひ通りにならぬ現實と實際に接
觸することによつて形成されるとき、それは將來の生活に對して應用の利く有效
なものとなつて行く」といひ、實際の経験を何より重んじて、それが直観を得るの道
だとしてある。單純な、しつかりと見透す精神方向なるものが最も大切であつて、
それが直観のはたらきだとも述べてある。「ラインハルトとガートルウド」に於て
は、直観を「靜かな、慎重な注視」の意味に解し、一七八二年の「シュヴァイツ週報紙上」教育に
ついての論文に於ては、精密な直観は、しつかりした、不定でない、誤りのない觀察精
神の結果として生れるものであるといつてゐる。さうして個人的經驗に誤りは
稀であるが、書物は當てにならぬものであるともいつてゐる。スタンツ時代（一七
九八—九九）に於ける教育事業の記録は、彼れの直観がまた經驗と殆ど異ならぬこ

とを意味するやうに述べてある。「私の經驗からすると、あらゆる教材が、彼等、子供達に對して眞理として示されるのは、より直觀的な、現實關係に結び付くところの、經驗の意識によつてである。」とも述べてある。この語に對するナトルプの註釋によれば、直觀的な經驗といふこと、それは對象の内觀インネンシヤクであつて、この内觀が根柢に横はるところの經驗なるものは、經驗主義者の意味する如きものではなくして、理會が先づあり、直觀がそれに従ふことである。いひ換へれば理會を實現せんとして、直觀が前進するの謂である。さうしてかゝる經驗を得るためには、多くを包含するところの大概念、「吾々の諸性向や諸關係を包含するところの大命題」が、より純粹な心理を以て人の心のうちに横はり、人の「認識能力」のうちに深く根柢を置くことである。それ等の大概念乃至大命題が、一言一語いひあらはされるとか、分析的に發展するとかいふことにならずとも差支ない。一般的な概念や原理の内容を、直觀的に經驗するといふことが、普通の經驗概念から如何に異なるかは、直ぐにわかることである。直觀そのものは、成るほど個々のもので、一般的のものでないにしても、この個々のものゝ中に、或る一般的なものゝが現示されるのである。かゝる

ことは、個々のものゝ中に、もともと或る一般的なものが横はるのでなければ不可能なことである。そのことは丁度、物を算へる一般的處置が、吾々の意識の中になくしては、吾々に示された個々のものを、一つ、二つ、三つと算へることの出来ないのももわかる。要するにペスタロッチのいはゆる直観は、それ自身として個々のものであるにしても、その個々のものゝ中に、或る一般的なもの、即ち悟性的概念的なものゝ存することを意味するのである、と。

以上の如きナトルプの註釋は、自説に都合のいゝペスタロッチの言句を引用して、強ひて經驗的思想を先驗的思想に置き換へたものと見られないことはない。ペスタロッチ自身は、彼がより直觀的な、現實關係に結び付くところの、經驗の意識といふとき、さまで先驗の見地に立つものではなからうと思はれる。

一八〇〇年の「備忘録」に曰く、『自然そのものゝ直観は、人の教授の本來の眞根據である、蓋しそれのみが、人の認識の唯一の根據である。』と。こゝに自然そのものの直観といふものは、ペスタロッチ獨特の用語であつて、汝自身の直観の自發性を意味する。平たくいへば、個人的經驗といふことに外ならない。これが基礎となら

なければ、如何なる認識も發展するものではないといふのである。彼はまた、吾々の精神の一般的根源といふことをいふ。これによつて、感性が外的自然から感受する印象を、統一にまで、即ち概念にまで把捉することが出来るといふ。吾々の精神の一般的根源なるものも、つまりは直觀の自發的性質を指すのである。彼があらゆる教授の形式を、永久的法則——即ち人の精神は、感性的直觀から明瞭な概念にまで自己を高めるといふ法則——に従はしめようとするとき、從來のセンスアリスムスが、感覺から認識が與へられ、悟性はただこの與へられたるものを統制するため、あらゆる形に於て來ると見るに反して、ベスタロッチは、感性的直觀のうち、創造的自己活動性を、對象を本源的に視るはたらきを認めようとするのである。かくしてあらゆる數も、あらゆる形も、あらゆる語も、要するに「悟性の成果」(Resultat des Verstandes)たるものであり、成熟せる直觀から生産されるものである。對象が數となり、形となり、線となり、姿となるのは、悟性の抽象によつて特殊の意識にまでもたらし得るところの、直觀の法則に従つて、吾々がそれ等を對象に附屬せしめて始めてあらはれて來るところのものである。ここに「彼が悟性の成果」と稱するものが、

ナトルブにとつては、單に論理的に解されねばならぬものゝ如くである。然るにペスタロッチにとつては、感性的直觀のうちにはさへ創造的自己活動性が認められるといふ意味が、必ずしも純粹の悟性のはたらしを指すのではなく、悟性のはたらしもその中に含まれてゐるといふにとどまるのであつて、悟性的のみならず感情的な、全人的な一切の心の自發的性質が豫想されてゐるのではないか。「悟性の成果」といはれるものも、それは純粹の悟性の成果といふよりも、直觀的悟性若くは悟性的直觀の成果と稱すべきものではなからうか。ペスタロッチの常套語である「汝自身」感性的精神的自然(精神的感性的自然)などが、單に狹義の悟性的認識の源であることを示すものとは、到底解し難いことではないであらうか。

子供が與へられた問題を自ら解決したといふ意識を有つときの氣高い姿は、Heureka (予は發見した)と叫んだギリシアの青年の輝く眼と同様である。自ら解決するといふこと、そのみが「人の進歩の純粹刺戟」である。自分自身によつて發見し、且つ自分自身のうちに發展させ得る、人の發明能力なるものは、最も不可思議な神らしきものである。認識の本源性ほど神秘的なものはない。——かかる語は

すべてベスタロッチがその老年に至るまでも絶えず繰返し用ゐたものであつて、殊に彼が「ガートルウド」の子供達についていつてゐる所は、代表的なものといへよう。曰く、『彼等が事物を理會するのは、彼等が何物をも學ばないかの如く、またその事物が彼等のうちに横はるかの如く、彼等に示される場合のみであつた。即ち彼等の教授は、本來彼等に何物をも注入することではなくして、ただ彼等自身のうちに存する力を發展させるに過ぎなかつた。その力によつて彼等は、外的に認識したところのものを彼等自身のうちに取入れ、彼等自身の力の純粹な修得として、彼等自身のうちに横はるものを認識するものであつて、何等外的な仕方を以てしては注入されるところのものではなかつたのである。』と。ここに於てプラトオの學習に對する説明が想ひ起されるとナトルプはいつてゐる。プラトオに従へば、學習なるものは、何等か自分自身に於て見出すところのものである。(das Bei-sich-selber=Findene) かくして子供は、彼自身とその力とを感ずることに於て熱烈であるやうに導かれなければならぬのである。子供は教授なるものを、あらゆる自立性にまで自己を高めて呉れる手段として理會するものである。實に陶冶の自律の

概念なるものは、あらゆる自己の法則に従ふところの、調和的に互に自己を發展させるるところの、人の根本力といふことに關係するのである。根本力の一つ一つが『自己特有な、それ等に自立的に内在する法則によつて、自己を發展させて行く。それぞれ自己に内在する發展への生々した努力によつて。』あらゆるこれ等の努力は『その本質上自立的で、その特有な法則からして自己活動的』である。私は結局ナトルプの註釋をここにも引用したのであるが、ペスタロッチが「人の根本力」といひ、彼等自身のうちに存する力」といひ、認識の本性性などといふのは、プラトオの「學習」の意味との關係は別問題とし、またナトルプの如何なる註釋があるにしても、畢竟狹義の悟性的認識の本性性の如きものを意味するのではなく、私が屢いつたやうに、全人的の心のはたらきの自發的、本源的性質のことを指示してゐるのではないか。さう見るところに、ペスタロッチの直觀の原理の眞意が存するのではないか。私の疑問は、ナトルプの註釋を讀めば讀むほど深められて行く。

イギリスの教育史家クエックはその著(註十)に於て、ペスタロッチの「直觀」といふ語に當條まるべき適當な原語のないことを述べ、強ひてこれを譯して、"Sense-impression"、

とする人があるけれども、この語にも二つの缺點がある。(1)「直観」は、“Sense”の範圍以上を意味する。(2)「直観」は能動的と受身的との兩面を有するのに、“Impression”は單に受身的のことを指すからである、といつてゐる。なほクキックに従へば、ペエン、ジエムス・マッカリスターの如きは、“Observation”といふ語を以て置き換へてゐる。しかしこれは、“Beobachtung”に相當する語であつて、「直観」ほどに十分廣い意味にはならない。そこでまたフランス語の“Intuition”を以て代用する人がある。これはカントが初めラテン語の“Intueri”から「注意と反省とを以て眺める」といふ意味で用ゐた語で、やゝ適當の譯語のやうである、とクキックは見てゐる。然るにカントにあつては、この語は純粹の思惟に對立して、更に受身的に感じ得られる直観の性質を示すに過ぎないので、ペスタロッチの「直観」の自發性を意味するものでないことは、前にもナトルプの意見として述べて置いた通りであつて、クキックのいふやうに、カントがこの語を「注意と反省とを以て眺める」といふ意味で用ゐたのではないやうに思はれる。けれどもこの語の原意が、ペスタロッチの「直観」をかなり適當にひあらはすものであることは、ビュイソンやデュリアンの解釋によつても信じ得られ

るところである。即ち前者によれば、「Intuition」は「感性的」、「知識的」、「道德的」の三様の「Sense」を意味するものであり、後者がその著「ペスタロッチの精神」に述べてゐるところによると、「Intuition」には内的と外的との「Sense」があり、内的なものには (1) The sense for the true, (2) The sense for the beautiful, (3) The sense for the good, (4) The sense for the infinite の四種があるので、ペスタロッチの「直観」はこれ等の四種の「Senses」を意味せんとしたものである。クキックがかう説明してゐるのに對して、私も直ちに同意したく思ふ。即ち私が屢々ペスタロッチの「直観」は、單に狹義の悟性的認識を指示したのではなく、全人的の「智慧」の芽生の自發的、能動的性質の神らしきものをいひあらはさうとしたものではないかと述べて置いた所以である。果して然るや、これは私が敢て世のペスタロッチ研究者に教を乞はんと欲する點である。

なほクキックに従へば、イギリス人ではロックのみがペスタロッチに近似する。蓋しロックは、知識の起原を “internal perception of the mind” だとし、“Knowing is seeing” といつてゐるので、ペスタロッチの「直観」そのまゝのことがこゝに意味されてゐる。

ただ兩者の異なるところは、ロックはルソウと共に、兒童が少くとも十二三歳に至るまではその頭腦を空虚ならしめ、“an unfurnished apartment to let”ならしむべきを主張し、智慧の芽生の早熟を警ましめてゐるに反して、ペスタロッチは、「智慧の芽生の自發的、能動的性質は、人の自然の要求であるから、ながらの學校である母の膝下からでも、方法的に助長すべきをいつてゐる點である。慥にこの異同があるであらう。異なる點についていへば、ペスタロッチにより多くの眞理があり、同じ點についていへば、兩者の直觀の原理を單に狹義に知識的に解すべからざること、私は切に感じてゐる。こゝに私の獨斷があるや否や。もしありとすれば、それは私の「直觀」であるといふの外ないやうな氣がする。

こゝまで述べて來て、私は最後に、チーグラがペスタロッチの「直觀」を如何に解してゐるかを補足し、私の所説が必ずしも私だけの意見でないことを甚だ愉快に且つ心強く示して置く。

”Und nun entwickelt er positiv seine Ansicht vom Wesen der Elementarbildung. Das Fundament ist die Anschauung im weitesten und höchsten Sinne des Wortes, die Betätigung aller

Sinne und weit über das Sinnliche hinaus alles Empfundene und Aktuelle; alles Selbstgetane und Selbsterlebte überhaupt, schliesslich sogar die Lebensbilder von Tugend, Glaube, Liebe, über die man nicht reden, sondern die man die Kinder ehen lassen müsse, Anschauungskunst ist daher der erste Unterricht, mit ihm beginnt die Mutter. “ (註十一)

- (註一) Natorp, Pestalozzi, sein Leben und seine Ideen, 1919, S. 35 f.
- (註二) Natorp, a. a. O. S. 42.
- (註三) Höfding, Rousseau und seine Philosophie, 1902, S. 100 f.
- (註四) Jules Lemaitre, Rousseau, vingt-neuvième édition, P. 220 et suiv.
- (註五) Moog, Grundfragen der Pädagogik der Gegenwart 1923, S. 145.
- (註六) Flitner, Zur geistes geschichtlichen Stellung Pestalozzis, “ Die Erziehung “ Februar 1927, S. 259.
- (註七) Moog, Geschichte der neueren Pädagogik, 1921, S. 315.
- (註八) Natorp, a. a. O. S. 48 f.
- (註九) Datorp, a. a. O. S. 57 f.
- (註十) Quick, Essays on Educational Reformers, pp. 360-364.
- (註十一) Ziegler, Geschichte der Pädagogik 1917, S. 305.